
留守番

甲斐仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

留守番

【Nコード】

N3912I

【作者名】

甲斐仁

【あらすじ】

留守番を、頼まれた。

「千香、お留守番してるのよ」

「はい」

少女と呼ぶにはまだ幼い、5つに満たない娘は意気揚々と母を送り出した。

母を送りだしたあと、千香は和室へと戻った。

家で唯一畳張りしたその部屋は、千香の遊び場でもある。

千香は畳上に座ると、にっこりとほほ笑んだ。

「ママ心配性ね、幸子ちゃんもいるのにね」

「うん、一緒なら平気だね」

千香は、人形を胸に抱き、ままごとの準備を始める。

幸子も一緒になって、おもちゃを広げた。

夏も中じろの。

蝉の声が耳に煩い、昼すぎだった。

「あ、幸子ちゃん、それなあに？」

千香は、幸子が持っていた二つの袋を指さした。

「おてだまだよ、こつやって遊ぶの」

上手に手のひらと甲でお手玉を受ける幸子。

可愛い声が千香の知らない歌をかなで、少しだけ眠気を誘う。

「千香ちゃん、あたしお腹減った」

唐突に歌がやみ、幸子が言った。
そうだね、と千香もうなづく。

「千香、れいぞうこ見てくる」

千香が、立ち上がる。

その時、カッン、と何かが倒れるような音がした。

千香と幸子は、振り返った。

先にあつたのは、立派な仏壇だった。

「あ、おまんじゅう」

幸子が、嬉しげに駆け寄った。

「幸子ちゃん、だめだよ。それ、おばあちゃんのだもん」

「でも、おいしそう。千香ちゃんのおばあちゃん、死んじゃったんでしょ？」

幸子が、饅頭に手を伸ばした。

「…うん」

「じゃあ、いいじゃない。いただきまーす」

幸子は、饅頭を頬張った。

「おいしいー。千香ちゃんも、食べたら？」

「…いい。千香、今でもおばあちゃん、好きだもん」

幸子は、3つあつた饅頭総てを頬張った。

「おいしかったー」

千香は、ちらりと仏壇をみた。

——おばあちゃん、お腹減ってないかな

「千香、帰ったわよー…千香？」

母は、千香が遊んでいた和室へと向かった。娘が、仏壇の前で倒れている様が目に飛び込み、慌てて駆け寄る。

「千香っ」

「ん…、ママあ？」

「もう、こんなところで寝て。さあ、折角だし一緒におばあちゃんにお供えしようね」

「うん。あれ、幸子ちゃんは？」

「こら、おばあちゃんを呼び捨てにしちゃ駄目でしょ」

そういつて、千香の祖母である幸子が好きだった、饅頭を供えた。

「さて…あら、千香。そのお手玉どつしたの？」

「もらったの」

千香は、自分で首を傾げながら、手に持つお手玉を見た。

「…おばあちゃん？」

——夏も中頃の、暑い日のことだった

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912i/>

留守番

2011年1月27日08時10分発行